

● ダンボール箱を使ってみよう！

さまざまな生ごみ堆肥化方法の紹介

市民団体の循環ネットワーク北海道により考案された方法です。屋内でできるため、冬でも生ごみが処理できます。家庭菜園やガーデニングの材料として広く利用されているピートモスともみがらくん炭を使い、また容器はダンボール箱を使うため簡単に始められるのが特徴です。

！こんな方に向いています

- 冬でも、生ごみを処理したいがあまり経費はかけたくない。
- 屋内（台所の近く）で使いたい。

《準備するもの》

- ・ ダンボール箱…2箱（縦30cm×横45cm×高さ30cm程度のもの。みかん箱など）
- ・ 箱の底を浮かせるもの（木片・ラップの紙芯など）
- ・ ピートモス 15ℓ ・ もみがらくん炭 10ℓ
（いずれも土壌改良材で、園芸店・ホームセンターなどで購入できます。）
- ・ 木べらまたはシャベル（かくはん用）

※箱の大きさや土壌改良材の量は1日に出る生ごみの量が500g程度（2～4人家族）の場合の目安です。

1. ダンボールを組み立てる

ダンボールの上ふたを立てて、紙テープで四隅をとめ、底が抜けないようにダンボールを敷いて補強します。別のダンボールでフタを作ります。

2. 基材を入れる

ピートモスと、もみがらくん炭をダンボール箱の深さ半分くらいまで入れ、水を加えてよく混ぜ合わせます（水分は基材をにぎって開いたときにすぐ崩れない程度が適当）。

3. 通気性を良くする

容器用のダンボールからは分解に伴う多量の水分（水蒸気）が全面から発生するので、周りの通気性を良くしておきましょう。（特に底に注意）

4. 生ごみを入れる

生ごみを細かくして入れ、よくかき混ぜます。かき混ぜ終わったら、ハエなどの虫が隙間から入らないようしっかり蓋をしましょう。

最初は米ぬかをひとつかみ入れると分解が早く始まりやすくなります。

5. 毎日の管理

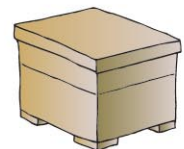
生ごみを入れる度（入れなくても、最低1日1回）、箱の中をかきまわし空気を取り入れます。基材の水分状態にも注意します。1～2週間で、温度が30℃台に上昇します。

6. 堆肥として使う

3カ月ぐらい続けたら、生ごみの投入をやめ、時々かくはんします。1～2週間後、土と混ぜ、更に1～2カ月程度置くと堆肥として使えるようになります。

💡ポイント

- 容器は、室温が15℃以上の所に設置する。10℃以下では分解されにくい。
- 投入する生ごみの量により、基材の量・箱の大きさを調整する。
- 生ごみを投入しなくても、1日1回は全体をよくかくはんする。
- 基材の水分は50～60%（にぎって開いたとき、すぐ崩れない状態）が適当。



これまで
冬は諦めていたけど、
この方法ならできそうね。

